

# 江差町（北海道）

## 【自治体のあらまし】

江差町は、北海道南西部の渡島半島西海岸に位置している。西側は日本海に面し、東側は緩やかな丘陵と低山が続いている。町域の中央を厚沢部川が横断して日本海にそそいでおり、居住地は海岸線と厚沢部川流域に連なっている。

江戸時代中期からニシン漁とヒバ材伐採で栄え、松前藩による交易の拠点港となり、「江差の五月は江戸にもない」と謳<sup>うた</sup>われるほどの繁栄を見た。

昭和 30 年 2 月に旧江差町と泊村が合併し、現在の江差町が誕生した。

江戸時代から商業で栄えたことから、現在でも第 3 次産業従事者が約 75%を占めているが、厚沢部川流域の沖積平野で行われている米・大豆などの農業や、イカ・<sup>べに</sup>紅ズワイガニなどの漁業も見られる。さらに、江戸時代からの歴史文化を生かした観光振興にも力を入れている。

人口 8,046 人（平成 29 年 3 月 1 日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

江差町は、商家や蔵が残る町並み、民謡「江差追分」や「姥神大神宮渡御祭」をはじめとする文化、檜山郡という地名の基にもなったヒバの森など、数多くの有形・無形の文化遺産が保存伝承されており、それらが現在の生活にも密接に根ざしている。

「歴史を生かすまちづくり」では、行政が情緒あふれる個性的な町並みを再生するハード事業を行い、地域住民が町並み再生に合わせて様々なソフト事業を展開している。

また、江戸時代から伝承されている文化遺産を、住民が楽しみながらも観光や産業などの地域振興にも活用する取組も行われている。

このように地域に伝わる文化遺産を大切に保存して活用しながらまちづくりを進めており、老若男女が生き生きと暮らす町の姿がその魅力を高めている。

### ●歴史を生かすまちづくり事業

北海道が昭和 63 年からの「北海道新長期総合計画」で位置づけた戦略プロジェクト「歴史を生かすまちづくり」において、特に歴史的資源が集中している「中歌、姥神町一帯の旧国道沿い地区（通称「いにしえ街道」）」が、平成元年にモデル地区指定を受けて始まった事業。

江戸時代から形成されていた商家・蔵などの景観を生かした街道整備などの公共事業とともに、住民によって町民野外劇・手ぬぐい製作・語りべ活動など、地域の特色を生かした様々な取組が同時進行で行われた。

平成 16 年に街路事業が完成した後も、かつて行われていた花嫁行列を復活させるなど、住民の活動は発展しながら継続している。



いにしえ街道



語りべ活動



花嫁行列

### ●江差三大祭り

7月に開催する「かもめ島まつり」では、漁業者がニシン伝説にまつわる瓶子岩のしめ縄かざり架け替えや北前船競漕大会<sup>きょうそう</sup>を行うなど、豊かな自然や文化遺産を活用した催しを行っている。

8月に行われる「姥神大神宮渡御祭」は、江戸時代から続いている姥神大神宮の祭礼で、江差を離れた人たちも帰省して参加する。北海道の調査では約4億円以上の経済効果があると試算されている。

9月に開催する「江差追分全国大会」は昭和38年から行われており、平成28年の大会で54回目を数えた。海外から来る方も含めて約370人の参加者を数える。

これらは「江差三大まつり」と呼ばれ、地域の文化遺産が観光や産業などに横断的に活用されて地域振興に寄与している取組である。



かもめ島まつり



姥神大神宮渡御祭



江差追分全国大会

### ●ヒバ（ヒノキアスナロ）の育成

江差町には、国指定天然記念物に指定されている「ヒノキアスナロ及びアオトドマツ自生地」があり、ヒバ材は江戸時代から寺社や商家の建材に利用されていた。

近年はヒバ育成の取組として、民間企業などの支援も得ながら、児童・生徒を含む町民や観光客が、「町民の森」や文化財修復に充てるために設けられた「檜山古事の森」でヒバ苗の植樹を行っており、その数は約1万本に達している。



ヒバ苗植樹の様子